

平城京左京二条二坊十一坪の調査(平城第533次)

今回の発掘調査は、集合住宅建設にともなうものです。調査区は平城京左京二条二坊十一坪の西辺にあたり、法華寺の南半部にあった阿弥陀浄土院跡と二条条間路を挟んで南側に位置します。これまでの調査で平城京左京二条二坊十一坪では、坪を一括して利用していたことが判明しています。坪の中心部では「コ」の字状に配置された正殿と東西脇殿を検出しており、公的な性格をもつ施設の存在が想定されています。調査区は東西6m、南北45m、調査期間は7月2日から8月22日までです。

検出した主な遺構は、掘立柱建物2棟、塀8条、溝3条です。これらの遺構は少なくとも4時期に区分できます。特に奈良時代は3期以上の遺構変遷が確認でき、塀のなかには、柱間が約3m(10尺)、柱穴の掘方が1辺1m以上の大型のものもありました。調査区は東西6mと狭いため、隣接する東西塀2条が組んで東西棟建物になる可能性もあり、西辺部にまで大型の建物や塀が存在した状況も想定できます。また、検出した柱穴には、掘方に柱根や礎板が残存するものが多くありました。柱根が残る柱穴では、地山が砂質の軟弱地盤のために柱の沈下が認められました。柱穴底部に据えられた礎板は、柱の不等沈下を防止するためのものと考えられます。

今回の調査では坪の中心部以外でも、建物群が複雑に展開する状況を確認しました。狭い調査区ながら、平城京左京二条二坊十一坪における土地利用の一端を知ることができました。

(都城発掘調査部 石田由紀子)



調査区全景(北から)

興福寺旧境内の調査(平城第539次)

今回の調査地は、観光客でぎわう東向商店街の入り口に位置します。東向通りはその名が示すように、かつては道を挟んで東が興福寺の築地、西には民家が東を向いて並んでいたと言われています。調査区は通りの東側、興福寺旧境内の西辺にあたり、ビル建設とともに9月16日から10月2日まで発掘調査をおこないました。調査面積は約50m²です。

調査区内は後世の開発により、北半分が大きく削平されていましたが、南半分で中世から近世にかけての遺構を検出しました。主な遺構は、大土坑2基、廃棄土坑2基、埋甕1基です。

大土坑は、東辺が調査区外まで広がり、大きさは5.1m以上、深さは0.7mあり、埋土からは「興福寺」銘がある軒丸瓦・軒平瓦を含む中世後半の瓦が大量に出土しました。調査位置から、興福寺西面の築地等に用いられた瓦が一括して捨てられた可能性があります。

また、検出した2基の廃棄土坑は、地面に穴を掘り不要品を廃棄したいわゆるゴミ穴です。いずれも江戸時代前期の土坑で、大きい方で径1.8m~3.0m、深さは1.8mあり、北西隅には土坑から脱出するための足かけ穴が残っていました。ここからは17世紀前半の陶磁器や土師器小皿がまとまって出土しました。そのほかにも、下駄や漆器椀、箸、桶、折敷等の木製品や胡桃や桃、瓜の種等、種実類も多く出土しています。

今回の調査では、古代の遺構は確認できませんでしたが、興福寺旧境内西辺における中世末期の様相の一端を知るとともに、近世前期の豊かな生活をうかがえる重要な資料を得ることができました。

(都城発掘調査部 石田由紀子)



廃棄土坑掘り下げの様子(東から)